

## 英語で書くということ -- 自然な方向か? (特集「英語の世紀」の地域研究)

著者	クー ブーテック, 川上 桃子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	178
ページ	29-30
発行年	2010-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00004466">http://hdl.handle.net/2344/00004466</a>

# 英語で書くようになって——自然な方向か？

クー・ブーテック

## ●私の言語体験

マレーシア・ペナン州のジョージタウンで生まれ、育ち、教育を受けた私は、言語とはいささか特異な出会いを経験してきた。幼い頃の私は、家族や近所の人たちとは、もっぱら私の母語であり、中国の方言である福建語で話した。

英語を話さない非華人系の人々との日常的なコミュニケーションの場面では、マレーシアの公用語であるマレー語を控えめに使った。私の弟妹やいとこたち、友人たちの一部は中国語学校に通ったが、私は、植民地期から一九七〇年代にいたるまで英語での教育が行われていた公立学校に通った。この間、小学生のときに「生徒の母語プログラム」のもとで、数年間、北京語の初歩を学んだ。

こういうわけで、私は学校教育を通じて、主に試験向けの正式なマレー語の能力を身につけたが、当時の学校の先生達や生徒達、役人達と同じように、もっぱら英語

で話し、読み、書くようになった。アメリカの大学に進学する頃までには、私は、中国語についての正確な知識は持たないかわりに、マレー語には相応に、そして英語には非常に通じるようになっていた。

ある意味でこれは、私を「どつちつかず」の状況へと導いた少々歪んだ経験だったといえるだろう。中国語で教育を受けた中国人たちはおそらく、北京語ができない私を「完全な中国人」とはみなさないだろう。私は後に、長きにわたる公務員生活のなかでマレー語を大いに使うことになったが、マレーシアの憲法によれば、私は「非マレー人」ということになる。

そして、私の英語力は、会話の面でも作文の面でも欠けるところがないのに、アングロサクソン諸国の役人達は、留学試験等の公的な目的のために、私にレベルの低い TOEFL のテストを受けさせた。私は英語の「ネイティブ・ス

ピーカー」ではないというのだ！

職業生活上の客観的な条件もまた、私の英語の使用に拍車をかけた。マレーシアでは、英語以外の言語で書かれた優れた最新の教材を手に入れることは難しかった。海外に出れば、英語の受容にさらに拍車がかかった。また、個人的にも職業上も、海外の研究仲間や学術界との接触と交流を常に維持する必要があった。このようにして、英語は「自然に」私の研究生活上の第二言語となったのである。

とはいえ、このような経験は決して私に限ったものではないだろう。地域や国による違いこそあれ、かつての「太陽の沈まぬ帝国」の統治対象となった地域の都市部——ただし必ずしも上流階層とは限らない——に共通するものだと思う。

## ●日本の研究者にとっての英語での執筆の意義

自分の母語ではない言葉で「

然的に」仕事をし、執筆し、成果を発表するという経験は、大多数の日本の学者や研究者にはなじみのないものだろう。それとは対照的に、大部分の日本人研究者には、日本語だけで執筆し、成果を発表するに十分な理由がある。日本には活発な学術セクターがあり、規模の大きな研究書籍の国内市場がある。日本の学者たちは、一般の人々や学術界の読者、そして政策決定者らの関心をひくために、最も得意な言語で自分たちの考えを表明することを選ぶだろう。

加えて、日本には研究や出版、さらには他の言語への翻訳までを支える豊富な資金源がある。優れた研究成果を評価するための形式やチャネルも整っている。

とはいえ、多くの——とりわけ若い日本の学者・研究者たちは、英語が支配的な地位を占める国際的な学術圏に向けて英語で執筆するべきかどうか、またそうするならば、どの程度まで英語での執筆に取り組むべきなのか、考えているに違いない。英語での執筆活動を通じて「国際化」には、自分が書いたものをより広い読者へ向け、より迅速により効果的に届けることができるという明確なメリットがある。また、英語で執筆

することによって、自らのアイディアを、世界の専門的な読者たちの基準に照らして厳密にテストすることによってはじめて、自分のアイディアが国際的な学術界で必要とされる厳密性、独創性、創造性、深さ、新しさといった基準に照らしあわせて、批判的な吟味に耐えられるものであるかどうかを真に知ることができる。

発展途上国では、研究の基盤がもろく、弱々しいローカルの声は外国語で行われる研究によって、しばしばかき消されてしまう。だが日本の状況はこれとはまったく異なる。一世紀半にわたる近代化と西洋化の過程で、日本語での研究と出版が押さえ付けられることはなかった。日本の学者・研究者が外国語での出版に時間と努力の大部分を割くことになると思えない。その点では、日本人研究者は、英語で執筆し成果を発表したいと思ったときに、それがどれほどの努力を必要とするものになるかを再検討すればいい。英語で書くことはとりたててデメリットにはならないだろう。

日本の研究者たちは、日本語で書かれた豊かな研究成果を、日本語を読めない世界の多くの研究者たちに届けることで、価値ある貢

献をすることができよう。私が知っている日本の地域研究者のなかには、彼らの仕事を支えてくれた異国の人々にも彼らの研究を読んでもらえるようにという賞賛すべき理由から、博士論文を英語で書くことを選んだ人たちもいる。

### ●外国のパラダイムへの従属か？

英語で書き、英語雑誌に発表することは、よその国で創り出された理論やパラダイムや研究アジェンダへの従属を強いるものだという懸念を抱く研究者もいるかもしれない。だがこれは、いくつかの理由から、誤った考えだ。

第一に、英語の研究もまた、他の言語で書かれたものから多くの恩恵を受け、またそこから多くを借用している。このことは、ラテンアメリカ発の独創的でチャレンジングな研究がなければ、経済発展をめぐる政治経済学研究がどれほど皮相的なものとなっていたかを想像してみればわかるだろう。第二に、英語の文献のなかでも、常に競合し合う複数のパラダイムや理論がある。実際、それはいかなる言語のものであれ、豊かで活力的な研究が生み出されているところであれば、自然かつ当然のことである。第三に、「国産」のパラダイムや理論は、国外に打っ

て出ることをしてみなければ、その真の価値も相対的な価値も評価することができないだろう。現代では、世界のどこであろうと、長期にわたって学術的な「輸入代替」を続けることは困難になっている。第四に、研究者どうしの複数国にまたがる協力は、世界中に広がり、深まっている。このような研究協力の質は、資金の出し手の関心や態度からの影響を受けるかもしれない。だが、有能で意識的な研究者は、常に互いを尊重し、対等な関係で協業できるものだ。そして最後に、言語それ自体が、ものの見方や世界観を決定してしまいうわけではない。いかなる言語においてもあれ、人は、支配的な言説や、その背後にある実際的な目的に対して服従することもできれば抵抗することもできる。

### ●英語での執筆への前向きなアプローチ

私の個人的な経験が実際には私だけのものではないように、日本的な状況もまた日本だけに限られたものではない。例えば、東アジアや東南アジアの研究者たちもまた、自国の人々に向けた自国語での執筆と、主に英語で行うことになる世界へ向けた発信とのあいだでバランスをとる必要に迫られて

いる。また、現地語で書かれた研究成果を、その言語を解さない研究者たちと共有することもまた、簡単には答えのみつからない課題である。日本の東南アジア研究では、Kyoto Review of Southeast Asiaが、現地語で書かれた論文の要約—さらに最近では論文全体を他の現地語および英語に訳出するという、ささやかながらも価値ある貴重な試みを行っている。だが、このような試みを定期的に、大規模に行うとなれば、多大な資源が必要になるだろう。

おそらく、英語で書き、発表することへの最も前向きなアプローチは、英語で書くことがもつ創造的な側面と、そこに人々がこめていく期待とを強調することだろう。英語を書くという努力の核心にあるのは、世界の教育と研究に対して新たな知見を提供し、研究の方向性や課題、それを支えるネットワークの形成に加わるという目的のために、国際的なアカデミアの強さと限界に対して積極的に関わっていこうとする願いなのである。

(クー・ブーテック／地域研究センター上席主任研究員・翻訳・新領域研究センター 川上桃子)